郡市医師会長からの抱負

医師会長再選の抱負

江別医師会
会長　笹浪（ささなみ）　哲雄（てつお）

６月末に開催された総会において、医師会長に再任されました。４期目となります。６年前、新型コロナウイルス感染症流行の時からスタートしました。最近は物忘れを自覚しますが、体調に問題はないので、次の２年間を頑張ろうと思っています。

これまでに夜間救急内科系輪番病院制が確立して、患者さんの江別市内への救急搬送率が着実に増加しております。昨年末には、１病院の経営問題がありましたが、この８月から新体制でスタートし、この体制もしっかりと維持されることになっております。

内科医の減少が続いていた江別市立病院ですが、長谷部現院長はじめ全職員、江別市の地道な努力により、昨年10月に消化器病センターが新設されました。これから、今増えている大腸がんをはじめとする消化器系がんの発見治療が増えていくと思います。消化器系のほか循環器系、腎臓系内科の医師も充実してきました。市内の医療機関からの紹介も増えております。

さて、高市内閣が2027年４月からの食料品消費税率１％の２年間導入を閣議決定しました。これからの国会で審議される訳ですが、内容・方向を注目していきたいです。医療費に課税しない理由を思えば、生活必需品である食料品にも課税しなくても良いのではと思います。

消費税収は年金・医療・介護・子育て支援など社会保障の安定的な財源に位置付けられています。大和総研の試算によると、食料品の消費税率が０％になった場合ですが、国・地方合わせて年間約５兆円の税収減となります。国民一人当たりの負担軽減が年間２～３万円と予想されますが、この数年間の食料品の値上げを見ると、今後も値上げの方向にあるでしょうから、何の効果も見込めないのではと思います。

さらに、現時点においては、明確な税収減の財源が示されていません。等々判断材料のない中ですが、賛否両論どんどん出して、国民の生活を守る方向へ進んで欲しいです。また、２年で辞めて８％に戻すことには反対いたします。

会長再任のご挨拶

函館市医師会
会長　大原（おおはら）　正範（まさのり）

令和８年６月18日に開催された公益社団法人函館市医師会第186回定時会員総会で会長に選任、選定されました。

１期目は中途からの登板ですが、３期目となります。

函館市医師会は北海道医師会の約５倍の予算規模の事業を展開しておりますが、近年は経営状態が思わしくなく多額の負債を抱えております。

人口減少・会員減少の時代に対応して、事業を変化あるいは縮小することが求められています。

看護・リハビリテーション学院の定員割れ問題、医師会病院の経営問題、健診検査センターの経営問題を時代に合致した対応、方向付けを役員、会員とともにやっていきたいと思います。

休日当番医制度、夜間急病センターの運営についても、開業医の減少および高齢化により修正が必要な状況となっています。

今年度からは、休日当番診療の一部を医師会病院の外来を診察スペースとする新方式で開始されています。

開業医にとっては、休日の職員確保、駐車場確保の心配がなくなり、医師会病院のCTも利用でき、1.5次程度の患者なら、そのまま医師会病院への入院対応も可能となりました。

また、長いデフレ・低金利の時代は終了し、金利のある時代になりつつあります。今年度の利払いは6,000万円に到達する可能性があり、金融機関の対応も重要となります。

北海道医師会、日本医師会のご指導、ご援助等も必要です。

今後共、皆様のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

会長再任４期目に思ふこと

三笠市医師会
会長　石黒（いしぐろ）　敏史（としふみ）

今年度の医師会改選にあたり４期目の再任となった。３期目就任の際にも呟いてしまったが、どなたか後任者に引き継いでいただけたら、きっと私とは異なる思い・情熱で当医師会の運営を行ってくれるのではないかと……期待していたのだが。

お隣の岩見沢市では、市立病院と北海道労災病院が2026年４月に経営統合し新病院完成を待たずに労災病院が閉院してしまった。通院・入院患者さんの振り分けが簡単にはゆかず岩見沢市立病院の外来、病棟、では急増した患者さんの対応に医療スタッフが多忙を極め、患者さんともども大変だったようだ。ちなみに開院は2028年とのこと。

当三笠市でも市立病院の老朽化・その他の事情のため岩見沢と同じく2028年開院予定で新病院の工事が始まっている。建設場所が現病院とは異なるため、今のところ不都合は生じてはいない。

病気や外傷の、起（発症・発生）、承（受診）、転（診断）、結（治療）が自己完結型で終われることが望ましい。この（起・承・転・結）行為のいずれかが限界を超えるものであれば他に頼らざるを得ないが、できる限り自己完結型に近づく事が大切だ。

今後ますます行き過ぎの感がある守備範囲の狭い医療行為の細分・専門化が否応なしに進んで行くのだろう、自己完結型を望むのは無理なことなのか。とにもかくにも市民・行政・医療側が皆で頑張ってゆくしかない。

医師会長２期目を迎えて

美唄市医師会
会長　石本（いしもと）　隆広（たかひろ）

今年６月の美唄市医師会定時総会において、会長として再任されました。２期目となります。少しは職務に慣れてきましたが、気持ちを新たに医師会の職務に取り組む所存です。

美唄市の人口は、令和８年６月30日時点で17,587人となっており、１年前より550人ほど減少しています。基幹産業であった炭鉱の発展とともに栄え、昭和29年のピーク時には91,400人でしたが、残念ながら、その後の人口は減り続けています。それに伴って高齢化率も45.2％と全国平均の約29％を大幅に上回っており、少子高齢化は顕著になっています。医師会員は現在30名となっており、やはり会員数減少と高齢化が目立つようになってきました。

そういった中で、美唄市医師会としてこの２年間に取り組めた事業としましては、世界禁煙デーに合わせて、５月31日から６月６日までイエローグリーンキャンペーン（市内の病院、診療所に加えて、市役所、保健センター、美唄駅、市内のホテルなどに同期間の夜間にイエローグリーンのライトアップをお願いするという企画です）を行えたこと、５歳児健診の際に追加して希望者に尿中コチニン濃度を測定できるようになったことが挙げられるかと思います。いずれも前任の井門明会長の頃から美唄市に働きかけを続けていた事業であり、これらが達成できたことは、行政との連携が円滑に機能している証左になろうかと自負しております。

美唄市の人口も美唄市医師会員数も規模が小さくなってしまいましたが、裏を返せば、お互いの顔が見えやすく、連携が取りやすいという利点もあろうかと思います。行政や関係機関とも協力させていただきながら、医師会の内外での病院連携を深め、住民の方が安心して暮らせるように地域医療を維持するために少しでも貢献できるよう、今期以降も必要な事業に積極的に取り組む決意を新たにしております。

医師会長４期目再選の抱負

滝川市医師会
会長　小西（こにし）　勝人（かつひと）

令和８年６月３日に第46回滝川市医師会定時会員総会において新役員を選任、その後の臨時理事会で私が会長に選定され、４期目の代表理事を務めることとなりました。

今までの３期６年を振り返ると、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の始まりから、収束しオミクロン株を経て５類移行となるまでの間、コロナに左右され続けた感があります。

しかし、それらは悪い事ばかりではなく、会議や学会のオンライン化、無駄な飲み会の減少、オンライン診療の普及など、一気に進んで良かった面も多々あると思います。

今後必要なことは、各種医師会組織の若返りと縮小でしょう。無駄にデカい組織はもう必要ありません。

他に、日本医師会のMAMISは、誰も面倒で入力したくない非効率的なシステムのようで、誰のための何のためのシステムなのか、どこを簡略化すべきなのか全く理解できない人達が作り上げたダメシステムとしか思えません。そういう事が理解できる若い世代にどこの組織も世代交代することが望まれます。

会長再任のご挨拶

芦別市医師会
会長　橋本（はしもと）　英明（ひであき）

このたび、今期（第５期）も引き続き芦別市医師会長を務めさせていただくこととなりました。これまで皆様には、温かいご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。微力ではございますが、地域医療を維持するため引き続き責務を果たしてまいります。

先日、芦別市の第10期高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画の策定に関する会議が開催されました。2040年問題を見据え、地域包括ケアシステムをさらに深化させ、地域共生社会の実現に向けて今後の地域づくりについて議論が交わされました。14年先の地域の姿を考えることに時の流れの早さを感じるとともに、将来を担う世代のためにも今から真剣に備える必要性を強く感じています。

芦別市の人口は、令和８年７月末現在で10,630人、高齢化率49.2％です。高齢者人口がピークを過ぎ減少する一方、医療と介護の複合的ニーズを抱える85歳以上人口、認知症、独居の高齢者は増加し、生産年齢人口の減少も進んでいます。限られた医療・介護の人材と資源をいかに有効に活用し、持続可能な体制を築くかが重要な課題です。

昨今の動向として、中空知地区では、地域医療連携推進法人の設立に向けた準備組織の設置が決定されました。さらに、あかびら市立病院と市立芦別病院、行政が一体となった一般社団法人中空知東部メディカルケアネットワークが設立されたことは明るい話題であります。

人口動態や社会構造が大きく変化する中、地域のニーズに応えるためには、自治体、医療機関、多職種との連携を一層強めることが不可欠です。皆様と力を合わせ、少しでも地域に明るい未来を見いだせるよう尽力してまいります。

今後とも皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

医師会長再選のご挨拶

深川医師会
会長　三木田（みきた）　光（あきら）

令和８年６月、総会・理事会において会長に再選されました。深川医師会は１市６町からなる北空知地域の医師約70名で構成されています。

北空知の医療圏は２次医療を担う深川市立病院を中心に、療養型ベッドを持つ３つの病院と精神科病院２か所が存在、さらに診療所の活動により地域医療、介護医療を行っています。今回の総会で議案になった、深川医師会附属准看護学院の閉校について承認されました。今年４月に第55回生の入学がありましたが、定員の半分で来年度さらに減少すると予測され、来年度募集停止、令和10年３月で閉校となります。少子化、看護系大学の増加により入学者が減少、経営的にも維持が困難となりました。時代の流れとしては仕方ないと考えますが、地域における医療、介護を存続させる上で、人材の確保はより困難となっています。今後は人材確保のために医療従事者の掘り起こし、各施設の情報収集も必要と考えます。

現在の医療情勢は大変厳しく、医療DX、特に電子カルテ導入と維持における経費問題など医療施設を存続するために、医師会としてさらに取り組む必要があると考えます。

また医師の高齢化により閉院が増加し、地方での新規開業は大変厳しく、行政とも相談しながら医師の獲得に努める必要があります。

地域医療の向上のため、医師会と行政、消防署隊員による、救急医療の実践と講演会を毎年開催し、AEDの使い方や心マッサージの実技を市民に啓蒙しています。また歯科医師会、薬剤師会と合同で講演会の開催など、各種の講演会を通じて、会員の知識向上に努めています。

少子高齢化により人口は減っていますが、救急車の出動件数は増加しており、医療の必要性はまだ増加しています。この状況を乗り切るためには各会員の協力が更に重要となり、皆さんが働きやすいように医師会として活動していきたいと思います。今後ともご指導ご協力よろしくお願いいたします。

医師会長４期目を迎えて

北見医師会
会長　吉田（よしだ）　茂夫（しげお）

本年５月30日に行われた定時会員総会、理事会にて会長に再任され４期目を務めることになりました。令和２年の１期目から新型コロナウイルス感染症対応に追われ、この間を振り返ってみますと正に「光陰矢の如し」と感じる、時の移り変わりの速さを実感します。

今も新型コロナ感染症の患者さんはいますので、油断はできませんし、新たな感染症の動向を把握する目的もあり、医師会として発生患者さんの統計と報告は続けております。

現在の当医師会の懸案は幾つかありますが、やはり医療人材、特に看護師の確保が大きな課題であります。また、人口減少社会の中で労働人口も減っていますが、オホーツク、北網そして北見管内においても患者減が現実的になってきております。一つ一つの課題に丁寧に対応するしかないのでしょうが、将来的にも人口が減っていくのが明らかですので、適切な撤退行動も考慮しての対応によって、地域住民が安心して住み暮らしていけるよう、ますます関係者の皆が本音で、仲良く相談し、成すべきことを実行していくことが大事だと思っております。

そうした中で小さな対応ではありますが、北見市が主催して８月に「みらいナースフェス」と名付けた、看護職に興味のある方のための相談会を開き、働き方、やりがい、奨学金などの説明をする機会を作ってくれましたので、若い人が看護職に興味を持ってくれることを期待しております。

また同じく８月末には北見医師会が主催して「心を一つにして地域医療をテーマに、開業医と勤務医交流会」が行われ、顔の見える関係づくりにとって良い交わりの機会となりました。更には北見赤十字病院が中心となって、オホーツク管内の医療施設の三役（院長、看護部長、事務長）が一堂に会して意見交換と懇親会を行い、相互の理解や協力について話し合うことができ、大変好評でありました。いずれにしても、厳しい医療環境の中で管内の医療・介護・福祉関係者が本音で地域において連携と相互協力を進めていくことが重要になってきていると痛感いたしました。

今後さらに、気候変動対応や疫病対応、そして少子高齢化や人口構造の変化、医療品を含めた急激な物価上昇など、想定を超える急激な医療環境の変革期を迎えていますので、医療や介護事業を継続していくためには地域にある医療機関同士、あるいは医療機関と介護・福祉機関が互いに本音で連携し助け合っていかなければならないと考えております。

自然災害が増えている

遠軽医師会

会長　田中（たなか）　実（みのる）

本年４月の再選で12期目となりました。再選の抱負執筆依頼を受ける度に何かしらの自然災害が発生し、今年も７月に熊本地震、８月に千葉豪雨と大きな災害が続いています。被害にあわれた皆さまに心よりお見舞い申し上げ、一日も早く平穏な生活を取り戻されますようお祈り申し上げます。

自然災害が少ないと言われていた遠軽町でも、2018年７月の集中豪雨で「いわね大橋」が損壊し、２年間ほど多くの町民が迂回路の利用を余儀なくされました。私が小学生の頃は実家をはじめ稲作農家が多く、家裏の用水路にはドジョウやカジカ、ウグイなど子どもには魅力的な生物が生息し絶好の遊び場になっていました。大雨の時には用水路や貯水池、田んぼの水量を増やして川の氾濫を抑えていたと思いますが、水量が大幅に増える雨降り後は用水路へ近づかないことが子どもたちの暗黙の了解となっていました。国の減反政策により田んぼは畑へと変わり、貯水池も小さくなり用水路も雑草畑かと思うほど荒れていたのですが、いわね大橋損壊を経験してから用水路や貯水池の役割が見直され上水道整備に合わせて再整備が進められています。

本年７月には防災の拠点となる遠軽町役場新庁舎が開庁しました。地上３階建て、議場には東京オリンピックの選手村で使われた木材が再使用されたほか、地中の熱エネルギーなどを使用し環境に配慮した施設となっています。役場と消防庁舎はつながった構造で、会議室などを共有して災害時の連携も取りやすくなりました。近隣に分散していた保健福祉課や教育委員会も集約され、町施設の移動に伴い医師会も遠軽町保健福祉総合センター「げんき21」内に引っ越しする予定です。町の中心部にあり広い駐車場も利用でき、会員の利便性向上も期待できます。

人口減少が進むなか限りある医療資源で突然起こる災害に対応していくためには、会員個人の頑張りに頼るばかりではなく、お互いが信頼できる関係を築きそれぞれの役割を認識して協力し合うべく、顔を合わせる機会を増やしながらその束ね役としての医師会でありたいと思っています。

６期目に私がすべきこと

美幌医師会

会長　田中（たなか）　克彦（かつひこ）

私事になりますが、今年の４月から医療法人の理事長を退職し、同医院の勤務医になりました。まだ60代ですが、10年後に当地域で、今まで同様の訪問診療を続ける自信が持てなくなったので、それならば早めに後任探しを行おうと考えたのがきっかけでした。幸い立派な後継者を見つけることができました。それに伴い、昨年の11月頃から医師会長も同様に後進に道を譲ろうと、あれこれと画策をしましたが、残念ながら、そちらは、会長になろうという希望者が現れずに、失敗に終わっています。昔は、当医師会でも、医師会長を選挙で決めていましたので、医師会長になりたいと思う人がいなくなった今の状況は、隔世の感があります。

美幌医師会は、会員数の減少に伴い、現在、医師会の運営費をどんどん切り崩している状況にあります。安定した医師会運営のために、会費の値上げを行わざるを得ない状況です。また、会員数の減少から、それぞれの医療機関の休日当番医の負担も増加しているという２つの大きな課題があります。美幌・津別・大空町の３町で構成されている美幌医師会ですが、当地域では2000年以降、急激な人口減と10年前から続く医師会員数の減少から、今回はとうとう他医師会との合併の可能性についての意見も会員から出るようになりました。

今回、医師会長に就任し、６期11年目になりますが、安定した、そして持続可能な医師会運営のために、会長を辞めようと考えた思いを払拭し、一念発起しなければいけないと考えるようになりました。ある意味、これらの課題に今まで手をつけず、目を瞑っていた私の自己責任でもあります。これからの２年間は、美幌医師会がこの地域にとって、どのような形で運営していくのがベストなのか、理事をはじめ全ての医師会員としっかりと話し合い、方向性を決めて行きたいと考えています。そして、次期には当会員の何人かが医師会長になりたいと思える美幌医師会にしたいと考えています。

会長再選の抱負

帯広市医師会

会長　稲葉（いなば）　秀一（しゅういち）

さる６月に行われた定時総会・理事会で帯広市医師会長に選任選定され、７期目を迎えることになりました。引き続きよろしくお願い申し上げます。

郡市医師会の活動は、医療提供体制と介護・福祉の充実への取り組みを通して、街づくりの一翼を担うことにあるとの思いがあります。これまでも、会員の協力と行政からの支援を受け、内科・小児科系の休日における一次救急医療体制を休日夜間急病センターでのセンター化、３年課程の看護師養成所の設立と医師会館の新築移転、膵がん早期診断プロジェクトによる膵がんの早期発見への取り組み、十勝圏ドクターヘリ常駐に向けた取り組み、そして地域医療構想等に取り組んでまいりました。これらを踏まえ今期の抱負として、以下の３つを重点項目として取り組んでいきたいと思います。

まずは救急医療の体制整備です。平成26年４月から帯広市休日夜間急病センターの管理業務については、帯広市医師会が帯広市と管理業務の協定を締結しており、５年ごとに更新しています。現在の協定は令和９年３月31日で終わります。多くの先生が出向することにより運用されている一次救急医療機関です。令和９年４月から５年先を見据えて、その役割を十分果たせる体制づくりに向けて取り組んでいきます。また、二次救急医療体制については、二次救急を担っている医療機関の財政的な負担が増えてきています。行政からの支援を含め、連携して取り組んでいきます。

４年目を迎えた帯広市医師会看護専門学校ですが、この３月に初めての卒業生を送り出し、市内７医療機関に就職しました。しかし、看護教員・外部講師・実習先の確保、そして何よりも学生の確保と課題が山積しています。安定した学校運営に向けて引き続き取り組んでいきます。

平成24年に導入した十勝メディカルネットワーク「はれ晴れネット」は、ハードウェアは既に13年が経過し、ベンダーからはサービスの終了の通知を受けています。非常にコストのかかる事業です。これまでの経験を活かし、多くの医療機関が有効に活用できる新たな地域医療情報連携ネットワークの設立に向けて取り組んでいきます。

十勝医師会長３期目にあたり

十勝医師会

会長　大庭（おおば）　滋理（しげり）

本年６月の定時総会をもちまして、十勝医師会会長の３期目を仰せつかることとなりました。早いもので、すでに４年が経過いたしました。

正直なところ、今回も一瞬、２期目なのか３期目なのか迷ってしまうほど、月日の流れの早さを感じております。

相変わらず、周囲の皆様には大変お世話になりながら、３期目を迎えることができました。改めまして、心より感謝申し上げます。

今期は、大きく二つのテーマを掲げております。

一つ目は、バイタルリンクの発展です。

バイタルリンクは、システム上で医療機関、訪問看護ステーション、調剤薬局、介護事業所、地域包括支援センターなどと連携し、同意を得られた患者さんの情報を共有することができる仕組みです。

これまでは、それぞれの地域で運用されておりましたが、今後は十勝医師会を中心としてネットワークを結ぶこととなりました。これにより、帯広市を含む十勝管内に各事業所が、より円滑かつスムーズに連携を図ることができるようになります。

しかしながら、この取り組みの進捗には地域差があり、小生の住む大樹町においても、恥ずかしながら、ようやく町の予算が確保されることとなりました。

今後は、十勝全体にあまねくこの仕組みが行き渡るよう、引き続き尽力してまいりたいと考えております。

もう一つは、ドクターヘリの十勝圏域常駐です。十勝総合振興局管内は、日本で７位の面積を誇る岐阜県と同程度の広さを有しております。その広大な地域をネットワークで連携することはもちろん重要ですが、ドクターヘリはヘリコプターで患者さんのもとへ迅速に向かい、治療を行いながら医療機関へ搬送することができます。

北海道のドクターヘリは、札幌、函館、旭川、釧路の４拠点に配置されておりますが、十勝独自のドクターヘリは、現在のところありません。

現状では、釧路または旭川に要請し、飛び立ってから現場に到着するまでに相当の時間を要します。さらに、背後には日高山脈がそびえており、日高地方を含め、今後ますます需要が高まることが予想されます。

この件については、帯広市医師会が先行して尽力されておりますが、十勝医師会としても協力し、国や道、さらには管内町村へ働きかけてまいりたいと考えております。

２期目を迎えての抱負

札幌医科大学医師会
会長　渡辺（わたなべ）　敦（あつし）

このたび、2026年４月より札幌医科大学医師会長として２期目の任に就くこととなりました。

本学は、1945年に設立された北海道立女子医学専門学校を前身とし、1950年に戦後初の新制医科大学として開学いたしました。そして2025年、記念すべき創基80周年の節目を無事に迎えることができました。これまでに輩出した6,500名を超える医学部卒業生は、道内各地の医療現場をはじめ、全国、さらには世界を舞台に、医療活動や教育、保健行政など多岐にわたる分野で目覚ましい活躍を続けております。本会の歩みを支えてこられた先達と卒業生の皆様のご尽力に、改めて深い敬意と感謝を申し上げます。

近年、医療を取り巻く環境が大きく変化するなか、本学では時代に応じた革新的な取り組みを強力に推進しております。第一に、先進的医療の柱となる「再生医療の実用化」への着実な取り組みです。第二に「医療DXの推進」であり、電子カルテと健康データ（PHR）が連動した次世代スマート診療「ポータブルカルテ」の運用開始や「遠隔ICU」の稼働など、質の高い効率的な医療提供体制の構築を進めております。さらに第三として、災害医療・危機管理体制の強化が挙げられます。2026年10月には、国立健康危機管理研究機構（JIHS）のもと、災害派遣医療チーム（DMAT）の事務局が本学に設置される予定です。全国４拠点の一つ、そして医育大学附属病院としては全国初の基幹拠点として、広域災害における司令塔としての責務を果たしてまいります。

本学の建学の精神は、「高質で安全な医療を提供し、それを支える攻究と担える医療人を育てる」ことにあります。２期目を迎えるにあたり、この原点を深く胸に刻み、高度な医療の提供と次世代を担う医療人の育成に全力を尽くす所存です。会員の皆様とともに手を携え、地域医療の発展に寄与してまいりたいと存じます。今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

日本医師会公式YouTubeチャンネルの登録ならびに日本医師会LINE公式アカウントの友だち追加へのご協力のお願い

日本医師会では公式YouTubeチャンネルやLINE公式アカウントを通じて、さまざまな情報を提供しています。それらの情報をご活用いただくため、ぜひ、YouTubeのチャンネル登録ならびにLINEへの友だち追加を、下記の二次元バーコードからお願いいたします。

●日本医師会
公式YouTube
チャンネル

●日本医師会
LINE公式
アカウント

問い合わせ先：日本医師会広報課　E-mail：kouhou@po.med.or.jp